AA 研共同研究プロジェクト
『マルセル・モース研究－社会・交換・組合』平成 20 年度第 2 回研究会

日時　2009 年 1 月 31 日（土）午後 1 時 30 分より午後 6 時 30 分まで
場所　AA 研マルチメディアセミナー室（306 室）
内容
1. 昼間賢（早稲田大学）
　　「アンドレ・シェフネルとフランス・ジャズ ── モースと音楽をつなぐ」
2. 渡辺公三（立命館大学）
　　「21 世紀におけるモース像探究の再定位 ── 09 年度の研究方針」

1. アンドレ・シェフネルとフランス・ジャズ ── モースと音楽をつなぐ

この発表では、パリ大学民族学研究所からコレージュ・ド・フランスに至るまで、マルセル・モースの講義に通い、1929 年に創設されたトロカデロ民族誌博物館（現・人類博物館）では民族音楽学部門の責任者として優れた業績を残したアンドレ・シェフネル（André Schaeffner, 1895 - 1980）が、ちょうどモースの講義に通い始めた 1926 年に、両大戦間のフランスに衝撃を与えたジャズについて論じた『ジャズ』に着目し、その特性と、それが後のジャズ学に与えた影響、および後のジャズ学が受け継がなかったものの今日的な意味の考察が試みられた。本格的なジャズはまだ聞くことができなかった時期に、過去の文献からその本質に迫ろうとしたシェフネルは、ジャズの起源を黒人のアフリカに見定めた。その卓見は、厳然たる人種差別が許容されていた「本国」アメリカでは不可能だった。シェフネル個人の学識のみならず、当時のフランスでは、芸術の前衛が存在し、そして黒人はまだ想像の対象でしかなかったことが、本書の成立には奏効したと思われる。

そのジャズ論に、モースの教えがどれくらい関与したのか、直接的な因果関係を見出すのは困難だが、シェフネルにおいては、踊りを伴う音楽への一貫した関心があり、その身体性や行為性を積極的に評価する姿勢には、モースの「全体的社会事実」の影響が認められる。その意味では、現代的なポピュラー音楽研究のパイオニアとも目されよう。また多少の拡大解釈が許されるならば、演奏者間の関係がより対等であり、個人が書いた曲を集団的に書き換えていく、ジャズという音楽のあり方が、モースが思い描いた集団のあり方と重なるようにも思われる。音楽とは複数の人間が同時に一つの響きに関わる現象である。このような視点が、時事問題についても積極的に書き続けたモースをよりよく理解する助けとなるかもしれない。研鑽を続けたい。　　（昼間賢）

2. 21 世紀におけるモース像探究の再定位 ── 09 年度の研究方針

昨年 11 月からモース著作集として逐次刊行するという翻訳計画は実現できなかった。計画を見直して一年間繰り延べることが提案された。そのうえでふたつの点を確認する必要があった。ひとつは第一冊の刊行を実現するための翻訳その他の作業日程。もうひとつは第二冊め以降の刊行を引き続き予定通り半年ごとに実現するための並行した作業の進め方の確認である。

第一点については、8 月末までに校了とせねばならず、したがってその 2 か月前までに

は入校を終えなければならない。つまり第一冊（第４巻）については *6* 月までには翻訳原稿を作成しなければならない。それと並行してモース著作集の学的な意義を明らかにするエッセーを、月刊『百科』誌上に連載する。

第二点については、第 *2* 冊（第１巻）そして第 *3* 冊（第 *2* 巻）、第 *4* 冊（第 *3* 巻）の翻訳についても並行して進める必要がある。

この二つの点を踏まえて作業スケジュールを作成した。そこで重要なのは少なくとも第１巻から第 *4* 巻までに収録される主要な論文については訳語の統一を実現することであり、したがって第 *1* 冊（「贈与論」を含む）の初校の段階で用語の統一を検証できるよう「呪術論」「供犠論」「*Nation*」については *2009* 年 *6* 月までに翻訳素稿を完成し用語の統一を図る必要がある。そのためにすでに本文の訳稿のある「贈与論」については訳語と原語の対応表を *4* 月末をめどに作成する。すでに以前の研究会でも指摘されたが、こうした対応表と並行してモースの術語の展開の過程を通時的に跡づける作業の必要性も確認された。たとえば *prestation* → *prestation totale* → *prestation totale agonistique* といった展開である。この作業はモースの思考がどのように展開したかという検討にほかならない。（渡辺公三）